

知ることが出来る。讀者は第五圖を精細に觀察することによつて自から學ぶ所があるであらう地名を記入せざる等高線圖を此の度作製した

ので其の三、四を取つて地形と地質との説明を試み讀者の注意を喚起せんと試みたのである。

# 臺灣の氣候 (一)

神保六合男

## 目次

### 一、序説

(一) 天文的位置

(二) 海陸の關係、山脈の走向、海流

(三) 臺灣の氣候概観

### 二、各氣象要素

(一) 氣温

(二) 氣壓及風

(三) 濕度

(四) 降雨

### 三、結論

(一) 累年平均氣象要素

(二) 全島氣候區及其農業との關係

### 一、序説

氣候は其地の地球上に於ける地理學的位置即ち緯度、周邊海陸との關係、地形、海流等によりて決定せられる。

臺灣の氣候を論ずるに當り、左に其氣候を決定する諸要素を明かにし、進んで臺灣の氣候を概観し、次節に於て各氣象要素について逐次述べる事にする。

(一) 天文的位置 臺灣は北緯二十一度五十三分六より同二十五度十九分三に亘り東經百十九度半より同百二十二度に至る間に位置し、Supan

氏の所謂熱帶地方に屬してゐる。然し等温線の大勢から觀れば年平均氣温に於て阿弗利加及び中央亞米利加の同緯度よりも五度乃至十度低度を示してゐる。

(一) 海陸の關係、山脈の走向、海流 本島は亞細亞 Monsoon 地帯に屬し一衣帶水を隔て、支那大陸に對し、而かも東支那海の水位が百米低下すれば臺灣は大陸と陸續きとなり、其東縁をなす事となる。此の如く大陸に密邇する位置を占めるから冬季に於て北東 Monsoon の影響を蒙り氣温割合に低く、夏季南東 Monsoon の卓越する期間は海洋の影響を受けてゐる。北微東より南微西に走る全長八十五里幅二十里の中央山脈は本島の東海岸を洗ふ日本海流(水温、夏季平均十七度位にて附近の海水より高き事平)、(均十八度、冬季平均四度、速力百三十哩、幅五十哩乃至百哩)と前記、亞細亞 Monsoon と相俟ち 臺灣獨特の氣候を生

み出してゐる。

(二) 臺灣の氣候概観 臺灣の氣候を概言すれば其位置熱帶、亞熱帶の間に介在し熱帶的氣候を有してゐる。島嶼なれども亞細亞大陸に接近し其の影響を受けること多大にして、大部分は海洋性氣候をなさず、大陸的氣候を示してゐる。冬季は北東季節風の影響を受けて、北部の次高山脈(パイバラ山脈)以北は陰濕、多雨、内地の梅雨の如く霖雨連日に亘り實に濕冷なる氣候を將來し、臺中盆地以南は乾燥快晴にして陽春の如き季節である。夏季は大陸の影響大ならず、寧ろ海洋の影響を受け、南又は南東の季節風卓越して新高山脈(阿里山山脈)以南に多量なる降雨を齎し、尙ほ熱源雷雨の頻發するなど全く太陽直射の影響を蒙る事大にして、臺中以南の盆地並びに山地に於て特に著しきものがある。

## 二、各氣象要素

### (一) 氣 温

各觀測地累年平均氣溫(攝氏)

地	各觀測地累年平均氣溫(攝氏)												
	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
恒春	平均氣溫	二〇.三	二〇.三	二二.二	二四.五	二七.三	二九.五	二七.二	二六.六	二五.二	二三.三	二二.三	二四.〇
	最高氣溫ノ平均	二四.〇	二四.三	二六.四	二八.八	三〇.四	三〇.八	二九.〇	二八.四	二六.七	二五.五	二四.四	二六.〇
	最低氣溫ノ平均	一七.六	一七.三	一五.三	一三.三	一二.四	一〇.六	一〇.六	一〇.六	一〇.八	一〇.〇	一〇.九	一三.六
	較差	六.四	七.〇	七.一	七.三	七.〇	六.三	六.三	六.三	五.九	五.五	五.五	六.四
臺東	平均氣溫	一八.九	一八.七	二〇.七	二二.一	二二.一	二二.四	二二.二	二二.六	二二.四	二二.〇	一九.八	二二.四
	最高氣溫ノ平均	二二.三	二二.一	二四.〇	二七.四	二九.二	三〇.〇	二九.五	二九.四	二八.五	二六.一	二四.九	二七.六
	最低氣溫ノ平均	一五.七	一五.四	一七.三	一九.六	二一.七	二二.二	二二.八	二二.七	二二.〇	二一.二	一九.九	二〇.〇
	較差	七.六	七.七	七.七	七.八	七.五	七.八	七.七	七.六	七.三	七.二	七.二	七.六
臺南	平均氣溫	一七.〇	一六.八	一八.六	二〇.二	二〇.二	二〇.二	二〇.七	二〇.四	二〇.九	二〇.七	一九.二	二〇.〇
	最高氣溫ノ平均	二二.六	二二.四	二四.九	二八.八	三〇.〇	三〇.四	三〇.〇	二九.五	二八.八	二七.八	二六.八	二八.五
	最低氣溫ノ平均	一三.七	一三.五	一五.三	一七.〇	一八.一	一八.二	一八.二	一八.三	一八.五	一八.二	一七.一	一九.一
	較差	九.〇	八.九	九.六	九.八	一二.一	一二.二	一二.二	一二.三	一二.三	一二.〇	一〇.七	九.四
澎湖島	平均氣溫	一六.三	一五.七	一八.二	二〇.二	二〇.四	二〇.九	二〇.七	二〇.六	二〇.六	二〇.五	一九.一	二〇.五
	最高氣溫ノ平均	一八.六	一八.一	二〇.九	二四.六	二六.六	二六.六	二六.五	二六.八	二六.八	二六.三	二五.一	二六.一
	最低氣溫ノ平均	一四.〇	一三.七	一六.一	一八.八	一九.八	一九.八	一九.九	一九.九	一九.八	一九.八	一九.五	二〇.六
	較差	四.〇	四.四	四.八	四.八	四.八	四.八	四.八	四.九	四.九	四.九	四.八	四.五
花蓮港	平均氣溫	一七.一	一七.三	一八.九	二〇.三	二〇.九	二〇.二	二〇.七	二〇.八	二〇.三	一九.九	一九.五	二〇.三
	最高氣溫ノ平均	一八.六	一八.一	二〇.九	二四.六	二六.六	二六.六	二六.五	二六.八	二六.八	二六.三	二五.一	二六.一
	最低氣溫ノ平均	一四.一	一四.二	一五.八	一八.四	一九.八	一九.八	一九.九	一九.九	一九.八	一九.八	一九.五	一九.〇
	較差	四.五	三.九	五.一	六.二	六.八	六.八	六.六	七.〇	七.〇	六.五	五.六	七.一

平均氣溫	二五、七	二五、四	二二、八	二二、七	二七、六	二七、三	二六、六	二〇、二	二七、一	二二、一
最高氣溫ノ平均	三二、八	三二、一	二五、五	二六、八	三〇、四	三〇、五	二九、六	三二、四	三〇、一	二七、五
最低氣溫ノ平均	二二、五	二二、四	一八、一	二二、三	二二、九	二二、八	二二、六	二六、〇	二二、九	二八、二
較差	一〇、三	九、七	九、一	八、八	八、四	八、五	八、四	九、〇	一〇、四	九、三
平均氣溫	二五、二	二四、七	二六、九	二〇、六	二六、六	二六、一	二七、九	二五、一	二七、七	二六、七
最高氣溫ノ平均	二九、一	二八、四	二〇、九	二四、八	二六、三	二六、四	二五、一	二八、八	二七、二	二五、九
最低氣溫ノ平均	二三、三	二二、八	一四、〇	一七、三	二〇、五	二〇、九	二四、二	二二、一	二三、五	二二、八
較差	六、八	六、六	六、九	七、五	七、八	八、五	八、九	八、三	七、四	六、七
平均氣溫	二五、六	二四、九	一六、五	二〇、〇	二二、三	二二、三	二七、九	二七、七	二二、二	二二、六
最高氣溫ノ平均	二八、二	二七、六	一九、四	二三、二	二六、六	二六、二	三〇、九	二八、八	二九、七	二六、〇
最低氣溫ノ平均	一三、一	一三、六	一四、一	一七、四	二〇、五	二〇、五	二四、六	二二、四	二〇、九	一八、九
較差	一五、一	一五、〇	一五、三	一五、八	一六、一	一七、〇	一七、三	一七、二	一八、八	一七、八

北回歸線は嘉義の南方約三哩の地點を通過して本島を二分し南半は熱帯に北半は亞熱帯に屬してゐる。従つて前表にも示す通り夏季が長く且暑氣強く七、八月酷暑の候は三十二度(華氏九十度)以上に達する事が連日に亘る。然し此の最高温度は内地の各地に比して甚だしく高いとは言へない、唯暑季が五月から十月まで約半年間連續する事と、一日中、朝九時頃より夕方四、五時頃まで暑熱の續く點とが吾人の心身を倦ましめるのである。さりながら南部地方は

午後二時頃より雷雨を伴ひ雨後は稍々涼味を感じるのである。冬季は頗る溫暖で高山以外は降雪なく、偶々降霜を見るも、臺北で年平均一回未滿、結氷は領臺以來唯の二回に過ぎない。然も中部以南は時恰も乾燥期にして氣温高く極南恒春の如きは其地名の如く内地の陽春四月の氣候に髣髴たるものがある。

左表に依れば東京の十月末が臺灣の最低二月と匹敵し、東京の十一月から四月までは本島に於ては殆ど見られない事が分る。而して大泊の



十度以下の日数は左表の示す如く、前者に於て、臺北八一・七日、臺中七四・三日、臺南七〇・九日にして三地共、他の觀測地に比して非常に多く澎湖島の七・二日は最少である。後者に於ては臺中の二五・一日が最大で臺北の一八・五日、臺南の一三・七日等が之に亞いで多く、恒春の〇・一日は最下位で臺東、澎湖島、花蓮港等は稍々之より上位を示してゐる。

◎各觀測地に於ける氣溫華氏九十度以上の日數(累年平均)

恒春(二三・一日) 臺東(三七・四日) 臺南(七〇・九日)

澎湖島(七・二日) 花蓮港(三一・五日) 臺中(七四・三日)

臺北(八一・七日) 基隆(四一・六日)

◎各觀測地に於ける氣溫華氏五十度以下の日數(累年平均)

恒春(〇・一日) 臺東(〇・六日) 臺南(一三・七日)

澎湖島(二・〇日) 花蓮港(三・三日) 臺中(二五・一日)

臺北(一八・五日) 基隆(八・九日)

斯る氣溫分布は全く地形及び關係及び關係的位置の仍つて然らしむる所にして、前記、臺中、臺北、臺南等は内陸盆地性氣候の特徴を指示し、澎湖島、恒春、臺東、花蓮港、基隆等は海洋海岸性氣候の特色を顯してゐる。

## 臺灣の氣候

前記累年平均最高最低氣溫表の示す如く氣溫較差は、恒春の七・二度を最少に臺北の一三・四度が最大である。而して臺南、澎湖島の比較的較差の多いのは大陸の影響を受くる事、他觀測地に比して大なるが爲めである。故に此の較差は南、恒春より北及北西に進むに従ひて増加してゐる。殊に注意を要するは花蓮港の月平均氣溫、最低一月(他觀測地は皆二月なるに)にして、且つ其緯度に比し、割合に各月氣溫較差の小なる事である。蓋し北東季節風は九月半より卓越し、本島の北東を掠めて北上しつゝある日本海流は漸次本島東海岸に吹き寄せられ遂に陸地の最寒二月に入らんとする頃は全く花蓮港より三貂角一帶の沿岸に添ひ陸地を洗ひつゝ北上する様になる。仍つて花蓮港の二日は他觀測地と異りて氣溫最低を示さないものである。尙ほ全年を通じて此の海流の影響を蒙ること莫大にして、其の較差小なる所以も亦此處に存するのである。

(二)氣壓及風 本島は大陸と大洋との中間に位置するを以て、氣壓は常に中和を保ち、季節的高氣壓部併びに低氣壓部の中心となる事なく、其、年平均七五九・八耗は殆ど海面上の平均に近く、最高一月の七六四・九耗は東京より稍々高く九州西部と略々同壓にして、西比利亞南部、蒙古地方の高氣壓部より一〇耗低位に在り、同

時に太平洋の西南方、北部濠洲に蟠居する低氣壓よりも一〇耗高位を示してゐる。最低八月の七五三・九耗は九州各地と稍々匹敵し、濠洲の高氣壓部より十一耗低く、北支那より滿洲に起る低氣壓部に比して約三耗高位を示してゐる。従つて本島及其近海に卓越する風向、風壓は自ら察知することが出来る。

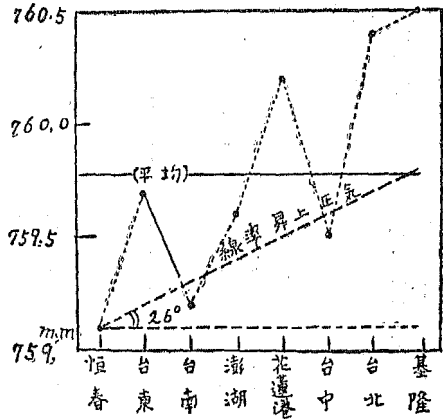
各觀測所に於ける累年平均氣壓(海面上に更正)(箱)

	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	平均
恒 春	七三三、四	七三三、七	七三六、六	七五五、五	七五七、三	七五五、六	七五八、八	七五八、一	七五七、三	七五九、四	七六二、五	七六三、九	七五九、一
臺 東	七四〇、六	七三三、八	七三二、四	七三〇、〇	七三〇、五	七三〇、二	七三〇、六	七三〇、八	七三〇、六	七三〇、三	七三〇、〇	七三〇、二	七三〇、七
臺 南	七四〇、〇	七三三、三	七三二、九	七三二、七	七三二、三	七三二、五	七三二、六	七三二、九	七三二、二	七三二、四	七三二、八	七三三、四	七三二、二
澎湖	七四八、八	七四〇、〇	七三八、四	七三〇、〇	七三〇、五	七三〇、三	七三〇、五	七三〇、八	七三〇、四	七三〇、九	七三二、五	七三二、二	七三〇、六
花蓮港	七五八、八	七四〇、二	七三二、二	七三〇、五	七三〇、七	七三〇、三	七三〇、九	七三〇、七	七三〇、一	七三〇、九	七三二、二	七三二、〇	七三〇、二
臺 中	七四四、四	七三三、七	七三二、三	七三〇、〇	七三〇、五	七三〇、六	七三〇、七	七三〇、〇	七三〇、四	七三〇、七	七三二、二	七三二、八	七三〇、五
臺 北	七三〇、〇	七三〇、〇	七三〇、四	七三〇、〇	七三〇、七	七三〇、二	七三〇、四	七三〇、八	七三〇、〇	七三〇、二	七三二、一	七三二、七	七三〇、四
基隆	七三〇、〇	七三〇、一	七三〇、七	七三〇、九	七三〇、九	七三〇、三	七三〇、四	七三〇、六	七三〇、一	七三〇、四	七三二、三	七三二、八	七三〇、五
各地平均	七四〇、七	七三〇、〇	七三二、四	七三〇、二	七三〇、六	七三〇、四	七三〇、六	七三〇、九	七三〇、六	七三〇、三	七三二、九	七三二、四	七三〇、八

本表に依れば年、平均氣壓に於て、最高基隆の七六〇・五耗、最低、恒春の七五九・一耗其他は兩者の中間に位し、北より南するに従ひて漸

次遞減してゐる。而て兩觀測地の年平均氣壓較差一、四耗に對し、緯度の差約三度なる故、年平均氣壓傾度は約三十分の十四、即ち〇・五に當

第二圖



る。是、上圖の如く fan 26° で現すことが出来る。尙ほ各地平均氣壓、各月分布状態を検するに八月の七五三、九耗を最低とし、一月の七六四、九耗と十二月の七六四、四耗とを兩肩とする

平均氣壓表(耗)

十、十一、十二、一、二、三(六ヶ月平均)	恒春	臺東	臺南	澎湖島	花蓮港	臺中	臺北	基隆
六、七、八(三ヶ月平均)	七五八、八	七五五、五	七五三、七	七五〇、五	七四七、七	七四四、八	七四一、五	七三八、六

臺灣の氣候

u 字形をなし、十月より翌年の四月までは七六〇、〇耗以上の高氣壓を示し、五月より九月までは七五八、〇耗以下の低氣壓を指示してゐる。

次に各月に於ける各觀測地の氣壓分布状態を圖示すれば二つの異なりたる型をなす。即ち一つは九、十、十一、十二、一、二、三、四、五月の示す夫で、共に北端基隆より南端恒春へと傾斜し、他は六、七、八月の示す Grad で正に前者と反對である。而して十、十一、十二、一、二、三の六箇月間は氣壓傾度大にして夏季三箇月は最も小である。故に理論上、前者に於ては風壓大なる北風を伴ひ後者に於ては弱南風を起す事となる。今同型の Grad をなす十、十一、十二、一、二、三月と六、七、八月と採り、夫々其平均を求むれば左表の如くである。

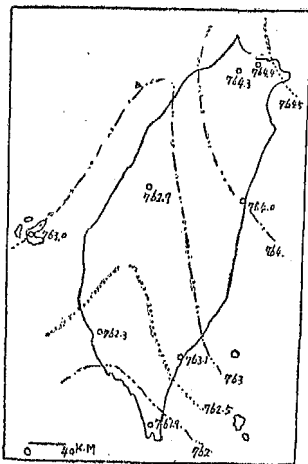


此の平均状態に於ける全島氣壓分布圖を作成

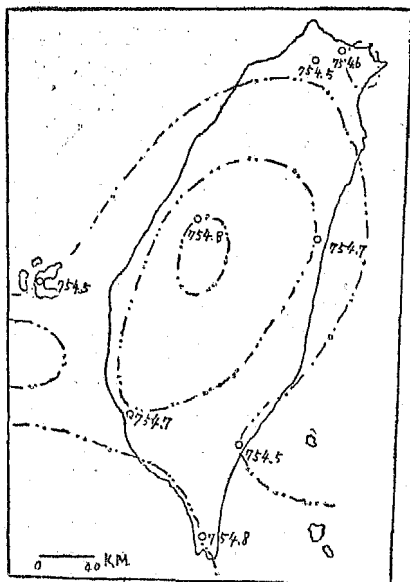
すれば左の如き等壓線圖を得らるゝと思ふ。

第三圖

六月、七月、八月平均氣壓及等壓線(數字ハ耗)



第四圖



六、七、八月平均氣壓及等壓線(數字ハ耗)

西遊夢

錄 (二十一)

瀧川規一

蘇國の部

【ロツホ・ロモンド周航】 インヅアスネイド (Inversnaid) の埠頭に立つて、思案に惑ふこと數刻、遂にロツホ・ロモン

ドを一周し、行く先の船着場に着く毎に埠頭で宿室の有無を聞かうと腹を決める。無謀なる大膽さではあるが今となつては如何ともする術がない。呼べば答へんばかりの對岸には連